

認知症の人の「働きたい」を支援 ～そして新たな居場所づくりへ～

神奈川県横浜市
有限会社 水車の里
グループホーム 水車の里
管理者 高田 朱美

1 はじめに

グループホーム水車の里は平成18年4月に開設した認知症高齢者グループホームです。「共に歩む」を理念に掲げ、誰もが自分らしく住み慣れた地域で共に支えあいながら安心して暮らせるまちづくりに取り組んでいます。

今回は「認知症になったら何も分からなくなる」「介護施設に入ったらもうおしまい」そんなネガティブなイメージを払拭する、認知症の方がいきいきと元気に活躍する取り組みの中から、「おばあちゃんちのアイスクリーム」を紹介します。

2 事例や取り組みの紹介

長年、青果店を営んでいたグループホーム水車の里入居者の吉本カタコさん（89歳）の「何か仕事したい」そんな一言が始まりでした。そして吉本さんの「また働きたい」「誰かの役に立ちたい」そんな思いに寄り添いながら共に悩んだ末にたどり着いたのが、グループホームで認知症の入居者さんたちが市販のアイスクリームを販売する「おばあちゃんちのアイスクリーム」でした。

お店をオープンするにあたり一番大切にすることは「入居者さん主体であること」です。そこで当事者である吉本カタコさんを代表取締役とし、銀行勤務経験のある住谷さん（75歳）に経理、地域に馴染みのある久保田さん（94歳）に広報、社交性の高い三浦さん（85歳）に営業、オールマイティに動ける嵐さんに総務、そして我がホームの長老、岩澤さん（100歳）には会長をお願いしました。営業許可については代表取締役の吉本さんと最寄りの区役所で手続きを行い、他のメンバーや介護スタッフの意見を聞きながらチラシを作り、入居者さん自身がポスティングやチラシ配りをおこないました。

「お客さんは来てくれるのだろうか・・・」オープン当日はメンバーも介護スタッフもドキドキでしたが蓋を開けてみれば「おばあちゃんちのアイスクリーム」は一か月で500個を超えるアイスクリームを販売し、多くの地域住民の方が水車の里を訪問して下さいました。

「孫が遊びに来ているの」「車がないからアイスが買えなかった」「社長（吉本さん）に会いに来た」など来店理由はさまざまですが、「足が悪くて」とおっしゃるご年配の方は「近くにお店がないから助かります」と定期的に来店され、吉本さんとはすっかり顔なじみの関係です。また小さなお子さんを連れてお母さんがグループホームでアイスクリームを食べて帰られたり、暑い公園でゲームをしていた小学生がアイスクリーム購入後、グループホームを見学し、リビングで休んでから帰宅したりと、気づけばグループホーム水車の里は新たな地域住民の交流の場となっていました。

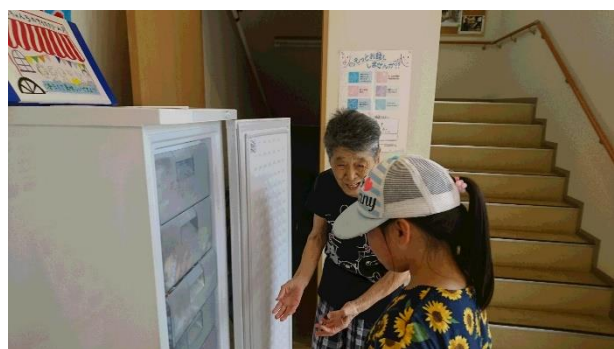
3 考察

はじめは一人の入居者さんの「また働きたい」「誰かの役に立ちたい」という思いを叶えるための取り組みでした。吉本さんは毎日お客さんの来店を楽しみにされ、お客さんとのちょっとしたおしゃべりを楽しみにしています。オープン当時は難しかったお釣りの計算もしばらくすると一人で出来るようになり、リピーターの子供にアイスクリームをご馳走するなど、青果店を営んでいた時のような仕事ぶりを垣間見ることができ、吉本さんらしい生活が認知症になっても途切れることなく継続できていることを実感しました。

そして今回の取り組みで認知症の入居者さん達が地域の方と自然に交流できる機会がととも増えました。また当ホームの入居者さん達との交流を楽しみにして下さる方もできました。暑い日差しの中、グループホームが「涼」をとる休憩スペースとなり、子供たちが介護施設を知るきっかけとなりました。「ここは認知症の人がいきいきしているわね」と声をかけていただき、認知症の人へのネガティブなイメージを払拭する取り組みであったと思っています。

4 おわりに

残念ながらまだ多くの方が「認知症になったら何も分からなくなる」そんなネガティブなイメージを持っています。今回のような認知症の人が地域に関わり、人の役に立つ取り組みをもっと多くの方に知っていただくことで、認知症に関する理解が深まること、また認知症であっても、障害があっても、誰もが自分らしく安心して暮らせるまちづくりを考えるきっかけとなって頂けると幸いです。



写真・氏名等の掲載については、本人及び家族より了承を得ています。